

原語上演
日本語字幕付

100年の伝統!! 錚々たる歌手たちを輩出した名門歌劇場。

明治ブルガリアオーケルト スペシャル

ソフィア国立歌劇場

Sofia National Opera



エレナ・バラモヴァ

トゥーランドット

生誕150年、プッチーニ・イヤーに贈る
スペクタクルオペラ!



ヴェルディ 仮面舞踏会

運命の三角関係を彩る名旋律の花束!
ヴェルディ渾身の大作!



佐藤しのぶ



10月4日(土) 14:00 東京文化会館
10月5日(日) 14:00 東京文化会館

指揮:エミール・タパコフ
演出:ブラーメン・カルターロフ

〈2008年新演出〉

●予定される主なキャスト
トゥーランドット(S):マリアナ・ツヴェトコヴァ(4H)
エレナ・バラモヴァ(5H)
リュウ(S):セレーナ・ファルノッキア(両日)
カラフ(T):カメン・チャネフ(4H)
コスタディン・アンドレーエフ(5H)

10月8日(水) 19:00 東京文化会館
10月11日(土) 14:00 東京文化会館

指揮:クーン・ケッセル
演出:ブラーメン・カルターロフ

●予定される主なキャスト
リッカド(T):カメン・チャネフ(8H)
エミール・イワノフ(11H)
アメリア(S):マリアナ・ツヴェトコヴァ(8H)
佐藤しのぶ(11H)

2008年4月 現地レポート

オペラ大国、ブルガリアの実力を見た!

加藤浩子(音楽評論家)

ブルガリアは「歌手の国」である。ボリス・クリストフからニコライ・ギャウロフまで、ゲーナ・デミトローヴァ、アンナ・トモワ=シントウからヴェセリーナ・カサロヴァまで。ブルガリアの生んだオペラスターは、世界中にその名をとどろかせてきた。その栄光はこれからも続くだろう。そう確信したのは、この3月、小雪の舞う肌寒いソフィアで、《トゥーランドット》(新制作)の公演に接した時だった。役柄にふさわしく配されたソリストたちのレベルの高さに、驚嘆してしまったのである。

終始安定した輝きのある声で、難役トゥーランドットを見事に歌いきったエレナ・バラモヴァ(最後の二重唱を、演出の要請にこたえて横になったまま歌ったのは立派!)、若々しくたくましく情熱的なカラフを、危なげなく演じたカメン・チャネフ、可憐でありながら芯の強いリュウを、役柄そのままのリックかつ芯の通った声で歌ったツヴェトコヴァ・ヴァシレヴァ。いずれも適材適所という言葉がぴったりで、ブルガリアの歌手の層の厚さに驚かされた。とくに、ドラマティック歌手の層が薄くなっている昨今、確かなテクニックと力強い、ダイナミックな表現力を兼ね備えたブルガリアの歌手たちは、ますます世界中に活躍の場を広げていくのではないだろうか、そう予感させる公演だった。

ドイツを初めヨーロッパ各国でも評価の高いベテラン演出家で、歌劇場総裁でもあるブラーメン・カルターロフの演出は、「愛」によるトゥーランドットの成長とリュウの勝利をテーマとした、考えさせるもの。幕切れのサブ



ライズには、どきどきさせられた(これは見てのお楽しみ)。カラフルで変化に富んだステージも、音楽に応じたダイナミックな動きを見せる合唱も目が離せず、あっという間の2時間だった。

オペラの質は、その街の聴衆に大きく左右される。ソフィアでは、オペラが生活の一部となっていることが感じられた。初日でなかつたせいもあるのだろうが、聴衆の服装はかなりラフ。一方、出演者への反応は敏感で、このような聴衆がオペラを育てているのだなあと実感させられた。建物自体も雰囲気があり、木の色を生かした内装がシックな内部は、席数およそ900と、舞台を楽しむには理想的な空間。建物と中身(聴衆)の2拍子が揃った、街に根ざした劇場の魅力を感じることができた。

ブルガリアでは、旧東欧圏のシステムティックな音楽教育が機能しており、教育面での人材にも事欠かない。加えて、主だった都市に歌劇場があり、定期的に公演が行われているおかげで、教育を終えた歌手が、実際の舞台経験を積む機会も豊富だ。そのなかから、有望な人材が世界へと羽ばたいていく。《トゥーランドット》の充実は、そんなバックグラウンドの成果なのだろう。「オペラ大国」ブルガリアは、荒削りのダイヤモンドのように魅力的だった。

ソフィアの『仮面舞踏会』、圧巻の佐藤しのぶ!

山崎 睦(音楽ジャーナリスト)



ソフィア国立歌劇場で4月13日に上演されたヴェルディ中期の大作、「仮面舞踏会」は歌手・佐藤しのぶにとって、まさに会心の舞台であった。さまざまな条件がピッタリ満たされたのがその理由であり、まず彼女の扮したアメリア役が年齢相応で、しかも心情が自然に発露できる役柄であるという状況が整った成果である。いわば、佐藤しのぶと彼女の身の丈にあったアメリアが重なり合うことによって絶賛を浴びたのである。

子を持つ人妻としての年輪を重ねながら、国王リッカドの自分に寄せる思いを振り切ることが出来ない。それどころか王を愛する自分を顧みるとき、安らかな瞬間は過ぎ去り、心は千々に乱れるばかりのアメリアなのである。このような極限のドラマを彼女は迫真の歌唱と演技で舞台に自己投入するから、客席は冷静でいられるわけがない。現在、アメリア役に、佐藤しのぶほど適任者はいないであろう。

そして彼女の掛け替えない長所は、舞台姿の裏として立派なこと。ヨーロッパの舞台で決して誰にも引けを取ることなく、堂々と存在感を発揮できるのは、背丈があるという彼女生来の身体的特徴があるにしても、さらに自分を大きく見せる技が働いているのは確かである。いま、それを自然に醸

し出すことのできる当人の内的充実が及ぶ。とにかく日本人オペラ歌手で、これほど立ち姿が見事で映える人を他に知らない。

ソフィア国立歌劇場は3年前に「オテロ」で出たことがあり、だから勝手がわかっていて、裏方スタッフも旧知の仲であることが、佐藤しのぶの今回の成功に大きく結びついている。加えて相手役、リッカドを歌ったのが前回「オテロ」で共演しているエミール・イワノフで、ニューヨーク・メットやウイーンで活躍するこのテノール歌手は、その大きなキャパシティで彼女をサポートしてくれるから信頼感がひととき大きい。

共演歌手に関してさらに言えば、アメリアの夫であるレナート役のリッカド・マロフは、それこそ2メートルを超える巨漢であり、その体に見合った素晴らしい声の持ち主。第3幕第1場で、レナートと二人の謀反人、トムとサムエル(二人ともバス)が王の暗殺者を決めるシーンは、男声低音歌手の宝庫であるブルガリアの底力発揮で、身震いするほどの迫力がある。

今回の演出を担当しているブラーメン・カルターロフ歌劇場総裁の舞台は時間も場所も特定していないが、いたずらに奇を衒ったものでなく、ごく自然にドラマが進行するという点で、佐藤には入りやすかったことだろう。

自分が願望していたロールを舞台で歌ったこと、しかも素晴らしい条件の揃った環境で実現できたことで佐藤しのぶの満足度は非常に高く、10月のソフィア歌劇場来日公演を、このままのテンションで歌い通す意気込みを見せている。

【全公演】S¥24,000 A¥21,000 B¥17,000 C¥14,000 D¥11,000 E¥8,000 F売切れ 学生席¥4,000 ※夢倶楽部会員 S¥23,000 A¥20,000 B¥16,000 C¥13,000 D¥10,000 E¥7,200
★病欠、怪我、その他の事情でキャストは変更になる場合がございます。最終的な出演者は当日発表とさせていただきます。一旦お求めいただきましたチケットは、公演中止の場合を除きキャンセル・公演日の振替等をお受けいたしかねますので、あらかじめご了承ください。

主催:ジャパン・アーツ 特別協賛: 明治乳業株式会社 後援:ブルガリア大使館

★10月26日(日) 17:00 バルテノン多摩「トゥーランドット」お申込み:チケット・バルテノン 042-376-8181